

Anthropic排除が突きつける：日本企業 AI戦略の転換点

地政学的リスクと日本への影響



米国企業初の「サプライチェーンリスク」指定

安全保障上の理由で司法審査不能な排除措置が取られ、AIベンダー依存の脆弱性が露呈した。



日本の防衛産業への連鎖リスク

F-35や次期戦闘機開発に関わる日本企業が、排除対象AIを利用することでプログラムから外される懸念がある。



AI選定は「地政学的選択」へ



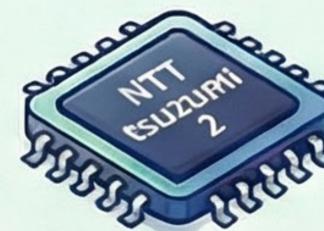
ITAR (国際武器取引規則)等の規制下で、ベンダーの政治的リスクを評価することが不可欠となった。



日本の「二層戦略」とガバナンス

国産LLMによる「ソブリンAI」の確保

機密業務には国産、汎用業務にはグローバルAIを使い分ける二層構造モデルへの移行が進む。



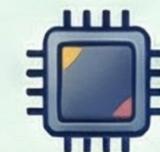
国産AIの台頭と実績

1,800件超

NTTの「tsuzumi 2」が1,800件超の受注を軽量・高セキュリティな国産モデルが普及。

ソブリンAIの選択肢

NTT
tsuzumi 2



300億パラメータ、1GPUで動作可能な軽量・高性能モデル

富士通
Takane (高嶺)



日本請負能で世界最高記録を達成、オンプレミス運用可能

NEC
cotomi



30万字の長文処理に対応、他社比最大150倍の処理能力

マルチコンプライアンス体制の構築

NIST AI RMFやISO 42001を総合し、経済安全保障推進法に即した独自の管理体制が競争力を左右する。